

# KELES Newsletter

## 関西英語教育学会報 2010年度 第1号

事務局(代行): 〒657-8501 兵庫県神戸市灘区鶴甲1-2-1  
神戸大学 国際コミュニケーションセンター 横川博一研究室内  
Phone: 078-803-7689 E-mail: yokokawa@kobe-u.ac.jp  
URL: <http://keles.web.infoseek.co.jp/> 2010年5月1日発行

### 会長挨拶

#### ～新年度にあたって～

昨年度のKELESの活動を振り返りますと、セミナーにおいては、Critical thinking、Teacher-Research、言語習得、言語使用、脳機能画像法、リフレクション等の最新かつ幅広い言語教育理論の展開、また、授業改善、自律学習、動機づけ、教師の語りのパワー等の日々の言語教育での実践の提案、さらに小中高連携による言語教育政策への提言など、KELESならではの、また、KELESであるからこそ可能な啓蒙活動が活発に行われました。また、KELES独自の関西主要3学会共催による卒論修論研究発表セミナーも、今回で13回目を向かえ、年を重ねるに従って充実した内容の研究発表が行われるようになってまいりました。全国英語教育学会鳥取研究大会におきましては、「SLAにおけるインプットとアウトプットの関係」をテーマに、全国から参加したパネリストによるフォーラムを開催し、170名の聴衆が熱心に聞き入りました。

一方、学会の顔であります紀要は第33号と号数を重ね、より多くの投稿者を向かえることができ、またホームページは、これまで以上に情報量を増やし、検索機能を強化した内容になっております。

このような充実した学会活動が行えたのは、幹事や役員はもとより、何よりも会員の皆様の教育・研究に対する熱意の賜でございます。今後ともKELESが一層の発展を遂げるよう邁進してまいります。

さて、本年度(2010年度)はJASELE2010大阪研究大会の年であります。2009年度の鳥取研究大会では「フェートン号事件」を受けて開始された英語教育から数えて200周年を記念とした大会でしたが、大阪には1838年に開校した「適塾」があります。そこでは1セットしかない辞書ズーフを奪い合って、徹夜で翌朝の会談に備えて外国語と格闘し、切磋琢磨することで、後の日本のリーダーとなる先人達が育った自由闊達な風土がありますが、これが今日の大阪の原動力の一つとなっていることは言うまでもありません。

そこで、この際、KELES会員一同が力を結集して、自由闊達な発想のもとに大会を企画・運営・実行する

ことで、全国の会員の心に残る充実感のある大会にしようではありませんか。

最後になりましたが、諸事情によりニューズレターの発刊が遅れ、会員の皆様方にご迷惑をおかけしましたことを衷心よりお詫び申し上げます。

吉田信介(関西大学)

### 新事務局

2010年4月より関西英語教育学会(KELES)事務局が変更になりました。幹事長の本田勝久先生が転出されたため、それに伴い、4月～6月までの間、横川博一先生(神戸大学)が幹事長代行をつとめ、事務局を以下の通り変更いたします。

関西英語教育学会事務局(代行)  
〒657-8501 神戸市灘区鶴甲1-2-1  
神戸大学 国際コミュニケーションセンター  
横川 博一 研究室内  
Phone: 078-803-7689  
E-mail: yokokawa@kobe-u.ac.jp

### KELES第14回セミナー(奈良地区)報告

関西英語教育学会第14回奈良地区セミナー(兼、天理大学英语教育研究会)が、2009年1月24日(土)に天理大学で開催され、奈良県以外からも大阪府、京都府、兵庫県、和歌山県などの近隣府県から、英語教育に関わる様々な校種の教員、英語教育関連の企業関係者、学生など、約130人の参加者がありました。これまでと同様に、今回も天理大学言語研究センター、全国語学教育学会)Nara JALT、NET Forum(県内の中学校の先生による自主研究会)と合同で開催しました。このように本セミナーの特色は、複数の学会・研究会から様々な教員が参加して交流を深め、お互いから学び合うことをモットーにしていることです。今年度は「英語教育はどう変わったか、どう変わるか」を統一テーマとして、全体としては新学習指導要領の求める内容と教育現場の課題を明らかにすることに努めました。

今回の研究会では大きく3つのイベントが実施されました。最初に、奈良県内の中学と高校の先生6名によるパネル・ディスカッションが行われ、「新学習指導要領への対応と中高の連携」をテーマに討議がなされました。続いて、Michael Boustany先生(明星大学)、Michael Greenberg先生(東海大学)による、ラップ・ロックを使って楽しく発音を学ぶ、「Rock into English - More Rhythms for Clear Speech !」と題したワークショップが行われました。最後に言語習得をご専門にされ、小中高の教育現場にも造詣の深い、白畑知彦先生(静岡大学)から、「新学習指導要領と小・中・高の連携」と題して講演をして頂きました。

今回の研究会にも多くの参加者からご感想を寄せていただきました。その一部を以下に紹介します。

- \* 他県(奈良県)の小中高の連携について知る機会がないので、パネル・ディスカッションはとても参考になりました。音読テストのビデオに出ていた生徒さんの発音、態度のよさにとても関心いたしました。日ごろの先生方の熱心な取り組みの成果だと感じました。(兵庫県、高校教員A)
- \* 本日は大変勉強になりました。来年から教職に就くことを考えると、現職で活躍されている先生方からお話を伺えたことは大きな刺激となりました。第一部で中高の先生方が取り組まれている活動や、第二部のロック音楽を利用した音声指導のアイデアあふれる活動を、私も将来的には取り入れてみたいと思いました。このように英語教育に関する生きた知識を得ることができたのもそうですが、何より、多くの先生方が真剣に学びに来られていることに感動し、勇気づけられる思いです。次回また、同輩・後輩を誘って参加したく思います。教職を目指す大学生にとってとてもモチベーションの上がる会でした。(京都府、大学生)
- \* 白畑先生の講義は本当に分かりやすく、本日最も勉強になりました。小中高の連携は難しいとはっきり言い切っていた上で、注意すべき点を教えていただき、今後の参考になりました。(兵庫県、高校教員B)
- \* 中学の教員として高校の取り組みが具体的に変わりつつあること、特に高田高校での先生方の共通理解、法隆寺国際高校の具体的な活動がとても参考になりました。中学校側から、実際にどんな教育課程になっているのか、紙の上の内容でなく、たいへん興味を持ちました。ワークショップのリズムの授業はとてもよい体験でした。生徒も楽しむためには教師が楽しむことを体感しました。そしてCDまでありがとうございました。白畑先生の、「これは楽しいという授業を続けることです」は大切なキーワードだと思いました。(奈良県、中学教員B)

最後になりましたが、関西英語教育学会の事務局から、本田勝久先生、泉 恵美子先生にお越しいただき、最初の受付から最後の懇親会までご協力をいただきました。この場を借りてお礼を申し上げます。

本セミナーは、英語教育に携わる広範囲の教員や学生の皆さんに支えられて、今年度も盛大に集まりを持つことができました。奈良地区セミナーは、これからも一層の充実を目指しますので、どうかよろしく願います。

中井英民(天理大学)

パネル・ディスカッション:「中学の授業と高校の授業-連携のための課題」

提案者: 西岡保千代(菟田野中学校)、吉田敬子(真美ヶ丘中学校)、江川優美(畝傍中学校)、俵本 睦(香芝東中学校)、徳永憲昭(奈良高校)、渡部憲一(法隆寺国際高校)

天理大学英语教育研究会のメンバーの先生方により、中学校、高等学校それぞれの授業実践、取組、中高連携のための課題についてご発表があり、その後フロアを交えた質疑応答が行われた。まず、中学校の江川先生からは授業ノートと練習ノートの書き方を中心として授業の受け方、授業はじめの様々なアイデアについて、俵本先生からは小中連携と地域高校との交流、中3の取り組みと冬休み課題について、吉田先生からは表現力を伸ばすための試みとして実際にALTとインタビューテストしている生徒の映像を見ながら評価についてお話しをいただいた。高等学校の徳永先生からは、和訳中心の授業からの脱却を目指して英語科全体で取り組まれた、授業改善プロジェクトの概要と成果、今後の課題について、渡部先生からは学校設定科目 English Immersion, English Reading, English Comprehensionの概要についてご発表があった。盛り沢山の素晴らしい内容で、時間が足りないくらいであったが、豊富な資料も準備され、中学校、高等学校の授業の現状がよく分かり、大変参考になった。今後指導要領が改定されても、コミュニケーションや音読などの音声を中心とした授業、自己表現活動を含めたアウトプットを重視した生徒中心の活動は今後も継続・発展していくと思われた。ただ、お聞きしながら、中高の連携は困難も伴い、成功は教師の意識改革に委ねられているという気がした。

報告者: 泉 恵美子(京都教育大学)

ワークショップ:「Rock into English - More Rhythms for Clear Speech !」(ラップ・ロックを使って楽しく発音を学ぼう!)

講師: Michael Boustany(明星大学)  
Michael Greenberg(東海大学)

会場がロック、ラップ、ヒップ・ホップ、ブルースなど音楽とビートにあふれ、楽しく身体を動かしながら、自

然に英語のリズムとイントネーションが身につくことを体感するワークショップであった。また、segmentalからsuprasegmentalに焦点を当てた発音指導の大切さを理論と実践を交えてご紹介され、両Michael先生の呼吸もピッタリで、思わず引き込まれ、TTかくあるべしと思わされるプレゼンテーションであった。ナーサリーライムや日常会話も、リズムを用いるだけで様々な表現や活動が可能であることを知り、是非授業でも実践してみようと思われた。また貴重な音源をご提供いただいたのも大変ありがたかった。

報告者: 泉 恵美子(京都教育大学)

講演: 「新学習指導要領と小・中・高の連携」

講師: 白畑知彦(静岡大学教育学部教授)

静岡大学教育学部教授および第二言語習得学会(J-SLA)会長の白畑知彦先生から「新学習指導要領と小・中・高の連携」というタイトルで講演を賜りました。私にとっては恩師でもある白畑先生に奈良でお会いできたことは大いなる喜びであり、昼食を一緒にとりながら、昔話に花が咲きました。

ご講演で白畑先生は、新学習指導要領の特徴を捉えるキーワードとして「コミュニケーション能力」と「実際の場面で使用できる運用能力」という2点を挙げられ、「新学習指導要領の特徴」と「小・中・高の連携」というテーマで分かりやすく話をされました。「新中学校学習指導要領」では、授業時間と語彙数の増加に対し、文法の「歯止め条項」の撤廃にも触れ、繰り返しの指導の重要性を述べられました。また、「新高等学校学習指導要領」では、「授業を英語で行う」というよりも「言語活動を英語で行う」ということを強調され、新旧英語科目の比較と科目再編について分かりやすく解説されました。「小・中・高の連携」については、連携を試みている静岡県の事例などを紹介され、連携の難しさも指摘されました。実際の連携をどの教育行政単位で行うのか(「小・中の連携」は市町村区単位で行うことが可能であるが、「中・校の連携」は市町村区単位では実施しにくいこと)、連携のメリットは何か(連携する意義や必要性を明確にし、両者でそのメリットを共有すること)について話されました。質疑応答では、中学校での語彙数が900語(程度)から1200語(程度)に増加したことから、具体的にどのような語彙が加わるのか、また、何をどのようにすれば小中連携になるのか、などが議論されました。白畑先生は、小中連携について「まず何ができるのか」を考え、教師間の交流や児童・生徒間の交流などの具体例を挙げられました。

小・中・高の教育現場を熟知した白畑先生の講演は、英語教員および英語教員を目指す学生にとっても大変有益な話であり、終了後の会場からの大きな拍手が講演の素晴らしさを物語っていました。

報告者: 本田勝久(大阪教育大学)

## KELES第15回セミナー(和歌山地区)報告

関西英語教育学会第15回セミナー(和歌山地区)が2009年3月14日(土)に和歌山市民会館第3練習室で開催されました。本学会評議員の奥田隆一先生(関西大学)が「どこに注目して英語を教えるか?」と題したワークショップを担当されました。また、午後からは「英語学習者の自立と動機づけー新しい学習指導要領を踏まえてー」というタイトルで本田勝久先生(大阪教育大学)と高木亜希子先生(大阪教育大学)による講演が行われました。それぞれの先生方から様々なご助言を頂き、有意義で充実したセミナーとなりました。当日は土曜日にもかかわらず、およそ25名の方々が参加されました。

ワークショップ: 「どこに注目して英語を教えるか?」

講師: 奥田隆一(関西大学)

英語を分かりやすく、興味深く教える、という点に焦点をあてたワークショップであった。日本語と比較した発音指導のお話から始まり、語順の違い、文法への深い理解の必要性にも言及されていた。さらに簡単な表現(years oldなど)の英語特有の使い方(That building is 60 years old.など)を示すことで、レベルに応じた指導が可能となることや、uni-, bi-, tri-などの接頭辞やson-, soni-, sono-などの語源を用いた語彙の導入の可能性を示された。街中にある看板(open, closedなど)や身近なもの用いて、英語への興味・関心を抱かせる具体例を多数示して頂き大変勉強になった。最後に、多義語指導の重要性および形を表す英語(triangle, diamondなど)のように、カタカナ語として普段使用している言葉に対する「気づき」を与えることの重要性を強調されていた。身の回りには、生徒の英語に対する興味関心を抱かせる教材がたくさんあるのだ、ということ再認識させられるワークショップであった。

報告者: 河本圭司(大阪市立大正北中学校)

講演: 「英語学習者の自立と動機づけー新しい学習指導要領を踏まえてー」

講師: 本田勝久(大阪教育大学)

高木亜希子(大阪教育大学)

前半は、学習指導要領の改定ポイント、そして動機づけの理論についてお話していただいた。改正にあたって、教師が校種の枠を超えて学習者の学習内容を事前に把握した上で指導にあたる必要があると説かれた。小学校の外国語活動の必修化をうけて、小中学校の連携が大切であり、それぞれの教育内容を把握する必要性が増したこと、義務教育段階の学習内容の定着を図るために、高校の教師が中学校の指導内容を把握し教えることを強調されていた。また、生徒のやる気をなくす要因は様々であるが、教師や学習環境が要因として含まれることを念頭

に置く必要があるとのことであった。

後半は英語学習者の自律についてお話していただいた。日本ではあまり馴染みのない自律という考え方を、ワークショップ形式で実践的に分かりやすく教えていただいた。学習者の自律を促進するための授業づくりとして、学期初め、学期中、学期終わりに分け学習者の自律を支援する活動例などを示された。教師のfacilitatorとしての役割を理解し、生徒の自律を支援する大切さを説かれた。

教師は4技能を伸ばすことに重点を置きがちであるが、学習者を動機づけることや自律を促すことの難しさや大切さを考えさせられるご講演であった。

報告者：戸田マリア(大阪教育大学大学院)

## 第12回卒論修論研究発表セミナー報告

第12回卒論修論研究発表セミナーが、2009年2月14日(土)に関西大学千里山キャンパスで開催されました。第12回卒論修論研究発表セミナーは、大学英語教育学会関西支部および外国語教育メディア学会関西支部の共催にて開催され、18件の卒業論文と15件の修士論文の研究発表が行われました。また、スペシャル・トークとして、桜美林大学大学院教授および大学英語教育学会(JACET)会長の森住 衛先生をお招きし、「私たち外国語教育に関わる者は、何を、なぜ、どう研究すべきか—日本の外国語教育を縦断的・横断的に斬る—」というタイトルで、お話をさせて頂きました。当日は145名の参加者がありました。

午前の部

【第1室】コメンテーター：吉田晴世(大阪教育大学)・里井久輝(摂南大学)

1. [卒業論文]小野由紀子(大阪府立大学)  
中国語母語話者を対象とした中日バイリンガルの二重符号化仮説の検証：表象言語との関係
2. [卒業論文]合瀬天規(京都教育大学)  
第2言語学習における想像力の重要性
3. [卒業論文]山邊 享(大阪教育大学)  
早期英語教育におけるDialogic Reading Methodを用いた読み聞かせの実践研究
4. [卒業論文]鳴海智之(神戸市外国語大学)  
リスニングの内容理解における推論の重要性について
5. [卒業論文]京極美慧(大阪府立大学)  
日本人帰国生の第二言語のスピーキングにおけるポーズの考察—自由課題と物語描写の2タスクにおける差異の比較—

【第2室】コメンテーター：玉井 健(神戸市外国語大学)・石川慎一郎(神戸大学)

1. [卒業論文]藤本真由香(京都教育大学)  
小学校英語活動のためのプロジェクト型カリキュラム
2. [卒業論文]宮本愛樹(京都教育大学)

外国語学習者の動機付けに関する研究：自己決定理論と学習歴に焦点を当てて

3. [卒業論文]片山智洋子(同志社女子大学)  
英語学習における動機の喪失～教師の影響～
4. [卒業論文]柿原達永(関西国際大学)  
英語における日本語の借用—成立過程と分類—
5. [卒業論文]稲垣宏行(同志社大学)  
第二言語ライティングにおける学習の機会としてのフィードバックの効果

【第3室】コメンテーター：山本勝巳(関西福祉大学)

1. [卒業論文]橋本愛(同志社女子大学)  
TPRをAdvanced Learnersに利用することは可能か？
2. [卒業論文]丸谷理果(神戸市外国語大学)  
外来語が日本人の会話に及ぼす影響—CommunicationのDynamismを探る—
3. [卒業論文]中川由子(同志社女子大学)  
発音教育は優良な英語学習のサイクルを促進する
4. [卒業論文]榎本隆(京都教育大学)  
小学校高学年の英語活動における文字の役割—絵本の内容理解を通して—

【第4室】コメンテーター：西本有逸(京都教育大学)

1. [卒業論文]加賀奈穂子(大阪教育大学)  
小学校外国語活動における効果的な日本語使用—3領域8場面の提案—
2. [卒業論文]藪本千穂(大阪教育大学)  
パペットを用いた小学校英語活動の可能性
3. [卒業論文]古納千亜紀(同志社女子大学)  
ウォームアップゲームは英語の授業に効果的に働くか？
4. [卒業論文]片桐杏実(大阪教育大学)  
英語授業でのフラッシュカード—達人に学ぶフラッシュカードの効果的な使用方法とその効果—

午後の部

【第1室】コメンテーター：有本 純(関西国際大学)

1. [修士論文]種井一郎(神戸市外国語大学大学院)  
The practice of whole language in public junior high school English language education: an analysis of three original projects
2. [修士論文]田中泰明(神戸大学大学院)  
日本人英語学習者コーパスに基づく英語起動表現の使用
3. [修士論文]加藤賢至(京都教育大学大学院)  
文法訂正が学習者の書き直しと保持に与える影響を探る
4. [修士論文]柳 美佐(立命館大学大学院)  
在日朝鮮学校における継承語イマージョン教育—小学校1年生の教室エスノグラフィ—

【第2室】コメンテーター：今井裕之(兵庫教育大学)

1. [修士論文]北川郁子(大阪教育大学大学院)  
日本人EFL学習者の語彙学習方略について

2. [修士論文]旗谷涼子(兵庫教育大学大学院)  
日本の学校教育において英語学習者の動機づけを  
持続させるものは何か:回想法を用いた一研究

3. [修士論文]平田悠馬(京都教育大学大学院)  
タスクタイプの違いが第二言語語彙習得に及ぼす効  
果:処理タイプと学習成果との関係

4. [修士論文]長谷川恵美(神戸市外国語大学大学  
院)

Roles of positive feedback in making an access  
students' inner thoughts

【第3室】コメンテーター: 若本夏美(同志社女子大  
学)

1. [修士論文]塩見千夏(関西大学大学院)  
我が国の外国語教育政策への提言—韓国の英語教  
育に鑑みて—

2. [修士論文]佐藤浩子(関西大学大学院)  
The effects of using katakana readings as visual aids  
on Japanese EFL high school students' pronunciation.

3. [修士論文]瀧見 夏(関西大学大学院)  
Form Awarenessの育成を目的とした中学生向け英語  
教材の作成

4. [修士論文]安福綾乃(関西大学大学院)  
Process writingを用いた中学生向け英語教材  
【第4室】コメンテーター: 泉 恵美子(京都教育大学)

1. [修士論文]田中典子(神戸大学大学院)  
帰国生の自己イメージに関連する要因—中学高校  
生の場合—

2. [修士論文]東 美里(神戸外国語大学大学院)  
How I have changed through reflective practice: my  
journey as a teacher

3. [修士論文]角田実環(京都外国語大学大学院)  
中学生に対するTPRによる文法指導の効果

スペシャル・トーク:「私たち外国語教育に関わる者  
は、何を、なぜ、どう研究すべきか—日本の外国語教  
育を縦断的・横断的に斬る—」

講師: 森住 衛(桜美林大学大学院教授)

教育と研究に対する根本的な問いかけから始ま  
ったこのスペシャル・トークだが、なぜ研究するのか  
(WHY)、何を研究するのか(WHAT)、そして、いかに  
研究するのか(HOW)、という根本的で本質的な視  
点を丁寧に確認すると同時に、現在英語教育を取り  
巻く状況の中で起こっている問題点に切り込み、私  
たちはいかにそれに対処すべきか、何を大切にす  
べきかについて深く考えさせられるお話だった。

まず、なぜ研究するのかの目的論については、特  
に学校教育や言語教育の目的を「人格形成と恒久平  
和」におき、言葉の教育は人間の社会とは切れない  
ものと位置付けられた。

また、「教育は実用であってはいけない。真の実  
用は教養がなければいけない。真の教養は実用に  
供しなければいけない。」と、教養と実用という側  
面から外

国語教育をとらえ、表面的な実用性を追い求めが  
ちの現状に対して、確固とした揺るぎない信念の必  
要性も強調された。

次に何を研究するか目標論の中では、言語材  
料や言語活動に加えて、言語観の検証の必要性を  
述べられた。これは英語やことば全体をいかにとら  
えているかの観点であり、教授者が意識していなく  
ても学習者にうすうす伝わってしまう「隠れたカリ  
キュラム」ともいわれるものである。

また、いかに研究するかの方法論に関しては、こ  
れからの若い研究者たちに向け、論文作成の意義、  
その過程で起こることを非常に分かりやすく解説し  
てくださった。さらには研究をする上での留意点も、  
例えば、「論文とは、世の中の混沌としている部分  
を筆者の切り込みや分析で明快に解説することであ  
る」等、具体的に紹介してくださった。

最後に、会場から「高校の授業を原則英語で、  
という今度の学習指導要領案に対してJACETの会  
長として何か言うことはできないか?」という問い  
かけに対して、学会としても考えていかなければな  
らぬ問題であるとの認識を示しつつも無色透明であ  
らねばならない学会の限界と、しかし、無色透明の  
思想性の可能性にも触れられた。さらに過去の様々  
な例から、今、働きかけができていくのは「時代の  
せいではなく、私たちの怠慢である」とし、困難  
ではあるが学会としても積極的に問題を考  
えていく必要性を述べられた。

森住先生の言葉はどれをとっても広くて深い  
経験に裏打ちされた人間性と教養にあふれたもの  
だった。もう一度原点に立ち戻って誠実に外国語  
教育を見つめなおし、日々実践していかなければ  
ならないと感じさせられた。

報告者: 太山陽子(京都教育大学大学院)

## 関西英語教育学会第13回研究大会報告

関西英語教育学会(KELES)第13回研究大会が、  
2009年6月6日(土)に摂南大学寝屋川キャンパス  
で開催されました。新型インフルエンザ感染拡大  
の中、第13回研究大会の開催が危ぶまれましたが、  
幹事会では関係機関とも協議を重ね、大阪、兵庫、  
京都、滋賀での休校措置が解除になるのを待って、  
第13回研究大会を予定通りに開催することができ  
ました。当日は、19件の研究発表および実践報告  
がありました。また、山岡憲史先生(立命館大学)を  
お招きし、本学会評議員の吉田晴世先生(大阪教  
育大学)とともに、活発なワークショップが行われ  
ました。さらには、講師として千葉大学教育学部  
の大井恭子先生をお招きし、「Critical thinkingの  
力を育むライティング授業の勧め」という題目  
で講演を頂きました。

第13回研究大会の開催について、発表者なら  
びに参加者の皆様にご迷惑をお掛け致しまし  
たが、当日はおおよそ140名の皆様の参加を賜  
りました。

午前の部

【第1室】司会: 清水裕子(立命館大学)

「小学校における日本人英語指導者を対象とした資質測定テストの結果」

松永 舞(近畿大学)

小学校における外国語活動が必修となる一方で、実際に指導に当たる現場教師のレディネスを整えることも重要課題である。松永氏は、CEFR等も参考にしながら、現状への支援策のひとつとして、小学校の英語教師の資質の要素とそのスタンダードを設定し、それに基づいた「資質測定テスト」の開発を試みられている。本発表では、7名の小学校教員を対象にした聴解(英検3級程度)と11分の面接テスト(スピーキング・指導力)の結果とテスト開発の方向性について報告されたが、多くの変数が関わる問題であり、今後も慎重な予備調査を重ね研究が進められることを期待する。

報告者: 清水裕子(立命館大学)

【第2室】司会: 岩井千春(大阪府立大学)

「言語コーパスに基づく使役動詞makeの補部構造の検証」

井上 聡(神戸大学大学院)

使役動詞構文の理解度の促進のためには、多義・多様な補部構造の解明が必要であるとの問題意識の下、井上氏は、本研究でBNCの言語データに基づいて、使役動詞makeの補部構造の検証を進められた。具体的には、①補部構造の典型性②補部動詞の典型性③補部構造の意味制約の3点の分析と考察を行い、併せて、日本人学習者コーパスの分析から補部構造の使用状況と補部動詞の使用状況の分析と考察も行われた。更に、最後には、教科書の例文の導入、典型性に関する指導の明示化、典型性判断テストの導入についての提案もされた。

報告者: 岩井千春(大阪府立大学)

「質問回答式辞書検索法:『コウビルド英英辞典(改訂第5版)』における動詞検索の場合」

秦 正哲(兵庫医療大学)

英英辞典検索方法を一つの統合化されたシステムとして提示した研究は非常に限られている為、本研究では、『コウビルド英英辞典(改訂第5版)』を対象とし、辞書検索方法を一つの統合化されたシステムとして提示することを試みられた。本研究の議論の対象は、動詞として機能する語彙項目であった。更に、本研究では、提示されたシステムの内容に関する考察に基づいて、学習者の英英辞典の検索をより効果的にするために辞書編集者が検討すべき点についての提案もされた。

報告者: 岩井千春(大阪府立大学)

【第3室】司会: 高木亜希子(大阪教育大学)

「『英語の授業は英語で行う』に関する一考察—英語教師・高校生の意識を中心に—」

上西幸治(摂南大学外国語学部)

高等学校の新学習指導要領で注目されている「英語の授業は英語で行う」について、普通科の高校教師と生徒に意識調査を実施し、その結果と考察が報告された。教師、生徒ともに、英語による授業に否定的な傾向があり、特に教科書内容は、日本語による授業を望んでいることが明らかになった。また、生徒は、英語力の向上を強く望みながらも、英語使用の不安や受験に対する意識から、教師よりも英語による授業に否定的な見解を持っていることが分かった。活発な質疑応答がされ、日本語と英語を併用した授業をどのように展開すべきか深く考えさせられた。

報告者: 高木亜希子(大阪教育大学)

「教師が変わるということ—5年間のリフレクティブ・プラクティスから」

山本真理(兵庫県立北須磨高等学校)

工業高校で行われたリフレクティブ・プラクティスの実践報告であった。自分を変えるためには、現在の自分を認識することが大切と考え、ティーチング・ジャーナルを通して常に自分を見つめることで、教師としてどのように変化していったか、発表者の語りから5年間の変化の軌跡が浮かび上がってきた。生徒のコメントからも、教師中心から生徒を信頼し生徒と共に創る授業に変化したことで、生徒が達成感を感じ、授業を楽しんでいることが伝わってきた。リフレクティブ・プラクティスの道具としてのジャーナルの意義を再確認するご発表であった。

報告者: 高木亜希子(大阪教育大学)

【第4室】司会: 有本 純(関西国際大学)

Notes and Suggestions on English Pronunciation Education in Japan

竹田 園(関西大学非常勤講師)

本発表は、25年間の教授経験に基づいた英語の発音指導についてであった。竹田先生によると、言葉にはアクセントがあり、pitch accent (high or low) と stress accent の2種類に分けられる。例えば、stress accent の strong, weak, long, short は、机を叩いたりして、強弱やリズムを示すことができる。本発表では、発音記号について、辞書表記の正確さ(簡易ではなく“正確な”表記)・Textの発音記号の統一など、文部科学省との連携の必要性が述べられていた。正しい発音の仕方や音の基礎の教育はもちろんのこと、リエゾンやリンク、また文中の単語の位置によってストレスの場所が変化することなど、学習者が理解しやすい発音指導についての多くの示唆が含まれた発表であった。

報告者: 片山智洋子(大阪教育大学大学院)

「教師が使うべきストラテジーは？ 一人音読・ペア音読・音読筆写？」

高橋昌由(大阪府立山田高等学校)

英文の記憶保持に関して最も有効な方法を検証するために、音読筆写・一人音読・ペア音読の間に有意差があるのか実証研究した報告であった。研究方法、授業の流れの説明は明確であり、相違結果は比較グラフで提示され、分かりやすいご発表であった。一度だけでなく、二度目の多重比較分析がされていたので、正確な実験であると感じた。結果では、音読筆写が他の2つの方法よりも効果的だと述べられていたが、生徒の質・ストラテジーへの適性も関与していることが分かった。音読筆写だけに焦点を当てるのではなく、3つの要素をうまく混ぜながらリーディングの授業を進めることが大切なのだと感じた。

報告者: 片山智洋子(大阪教育大学大学院)

【第5室】司会: 佐久正秀(大阪信愛女学院短期大学)

「中等教育学校に向けての英語科カリキュラムの作成と実践—ICTの活用と協同学習を生かして—」

高木浩志(神戸大学附属中等教育学校)

発表者が本務校で取り組んでいる協同学習、小中一貫英語カリキュラムの作成、ICTの活用について説明がなされ、それらに基づいた授業実践の紹介がなされた。取り組みはまだ途中ではあるが、意識調査からは授業に対する学習者の良好な反応を読み取ることができた。設備・機材などのハードウェアに頼りすぎることなく、授業者がそのアイデアと工夫によって学習者の意欲を引き出そうとする様子に感銘を受けた。本研究から得られる知見が中等教育学校のカリキュラム・シラバスの改良と実践にどのような形で貢献することになるのか、今後注目したい。

報告者: 佐久正秀(大阪信愛女学院短期大学)

「小学校外国語活動におけるCALL教材利用の効果」

生馬裕子(大阪教育大学)

吉田晴世(大阪教育大学)

大阪教育大学附属池田小学校における英語活動で用いられているCALL教材の特徴と利用方法が説明された。調査前に教材に触れる子どもたちの様子が分析され、教材の利用法について検討が加えられた。半年間にわたるCALL教材のログ記録と子どもたちが授業ごとに記入する振り返りシートをもとに、教材利用による子どもたちの英語力と態度の変化が分析され、その利用の効果について考察が加えられた。子どもたち自身が英語の聞き取りなどにスキルの向上を自覚しており、英語学習や対人コミュニケーションへの動機づけが高まっていることがデータから読み取れた。

報告者: 佐久正秀(大阪信愛女学院短期大学)

午後の部

【第1室】司会: 加藤雅之(神戸大学)

「ホテル業界におけるESP教育の実態とニーズ—国際観光整備法登録ホテルへのアンケート調査の結果から—」

岩井千春(大阪府立大学)

本研究では、日本全国の国際観光整備法登録ホテルに対してアンケート調査を行い、企業内英語教育の実態とホテル業務での英語使用を分析している。先行研究(Iwai, 2005)との比較も行い、また、今回の調査で拡充された研究の視点が示された。分析結果から、ホテル業界が英語教育を実施する上で抱える問題、そして、それをふまえて、大学及びホテル業界で英語を使って「仕事ができる」人材をどう育成することが可能かについての示唆が提示された。産業界での英語教育を分析することは大学のESP教育を考える上で非常に重要であることが実感された。

報告者: 本田勝久(大阪教育大学)

「児童文学と英語教育—『不思議の国のアリス』を題材に—」

菅田浩一(四国学院大学)

『不思議の国のアリス』は、イギリスの数学者にして作家チャールズ・ラトウィッジ・ドジソンが、ルイス・キャロルの筆名で1865年に出版した児童文学であるが、本発表では、この『不思議の国のアリス』を取り上げ、学習者がこの作品の持つ複雑さや奥深さに触れ英語文学に関する新たな知見を獲得することによって、英語力が高まることを目指した実践報告がなされた。『不思議の国のアリス』は、中学校の教科書にも登場し、馴染みのある題材であるが、本発表では、文章をじっくりと読むことによって、学習者の教養を高めると同時に思考力を養成することが重要であることが指摘された。

報告者: 本田勝久(大阪教育大学)

【第2室】司会: 横川博一(神戸大学)

「偶発的語彙習得とコンテキストによる援助の関係」

古樋直己(国立津山工業高等専門学校)

語彙学習は、学習者が語彙リストなどから明示的に語彙を暗記するプロセスと、リーディングなどの際に学習者の意識が意味内容に置かれている場合に生じる偶発的な語彙サイズの増加のプロセスとの2つに区分して議論されてきた。本発表では、意図的学習だけでは習得しきれないものを偶発的学習で習得することが必要であるという認識の下で、コンテキストによる援助との関係を調べた結果が報告された。英文テキストが長いと、コンテキストによる語彙習得への援助について分析が困難となり、テキストが短いと分析が可能であることが報告された。語彙学習では、学習者がどのようなコンテキストの中で語彙を学習するか、その学習過程を教師もきちんと把握する

ことが必要であると感じる発表であった。

報告者: 本田勝久(大阪教育大学)

「外来語分析と英語語彙指導—外国語活動における指導語彙の観点から—」

本田勝久(大阪教育大学)

佐久正秀(大阪信愛女学院短期大学)

カタカナ表記の外来語は、英語の正しい発音の習得の妨げになると言われることがあるが、カタカナ語はテレビや新聞などのメディアを通じて広く用いられ、日本語のなかで大切な役割を担っている。本発表では、日本人学習者の既存の知識と関連づけて英語を教えることは有効な手段と考え、(1)英語を語源とする外来語を採取・整理し、(2)それら外来語の頻度を分析し、(3)小学校英語活動(および中学校英語)における指導語彙との関係を調査した結果が報告された。日本語と英語の言語資料の分析に基づき、語彙指導における外来語の有用性や小学校英語活動における指導語彙についても提案された。

報告者: 岩井千春(大阪府立大学)

【第3室】司会: 泉 恵美子(京都教育大学)

「多重知能理論の対人的知能を活用した発信型コミュニケーション能力の育成—AICJ中学校(広島)のグループ学習を事例研究として—」

二五義博(広島国際大学非常勤講師)

本発表で、二五氏は、ガードナー氏が提唱する「多重知能理論」から、「対人的知能」の活用が、中学校英語教育の「コミュニケーション能力の育成」に効果があるとして、グループ協同学習の有用性を示した。部分イメージン中学校アンケート調査から、生徒の85%が、協同学習に楽しさを見出し、74%が積極的なコミュニケーションをとるようになったとしている。また協同学習により、多くの生徒が四技能の向上を実感する中、特にリスニングにおいては90%が身に付いたと自己評価している。興味深いのは肯定的に取り組むグループ活動内容が、ゲーム活動、技術家庭の調理実習、理科の実験観察、チームでのスポーツ戦術の話し合い等であったことだ。小・中学校において英語を教科横断的に取り入れる際に参考にしたい内容である。

報告者: 横山聡洋(京都文教短期大学付属小学校)

How phrase Reading Contributes to Students' Strategy Use in Japanese High school

太田裕美子(兵庫県立明石北高等学校)

フレーズリーディングの有効性は広く認められてきているが、高校では訳読スタイルでの授業がまだまだ多いという現状がある。その原因のひとつとして、フレーズリーディングでどのような能力が伸長するのかがあまり知られてないことがあるのかもしれない。本発表

では、フレーズリーディングによって生徒のリーディングにおける方略使用(推論や統語面)にいい影響があるということ、また生徒が楽しく、速く英語を読めるようになったと自覚できるという2点からその有効性が明らかにされており、非常に興味深い発表となっている。フレーズリーディングの有効性や可能性を改めて感じるいい機会となった。

報告者: 太山陽子(京都教育大学大学院)

【第4室】司会: 村田純一(神戸市外国語大学)

「音読指導で基礎を鍛えペアでの英問英答を目指す英語授業実践報告」

溝畑保之(大阪府立鳳高等学校)

英語学習における予習の重要性を改めて説かれるところから始まった。授業では、文法説明を簡潔に済ませ音読指導の時間に当てておられるように見受けられた。フラッシュカードを用いた練習では意味より発音に重点を置いた指導を行っておられた。また、生徒にヘッドフォンをつけさせ、教室の前で発表させる様子など実際の授業風景を見せて頂いた。さらに、教師がshadowingのモデルを実演し、生徒に英語を話す姿をイメージさせることで生徒のやる気を促すという方法も提案されていた。課題として生徒の発音及び質問作成能力の向上をあげられた。

報告者: 河本圭司(大阪市立大正北中学校)

静 哲人(関西大学)

「中3『総合英語』でのオバマ就任演説を利用した音声トレーニング:達成感のためのダメ出し」

ダメ出しは必要である。グループ練習は個人練習を十分に行ってからでなければ意味がない。生徒の発音はダメ出しをしなければ、直らない。発音に関する指摘は授業中いつでもどこでも、発音指導の時間でなくても指導する。このように先生の厳しさと温かさがよく伝わる発表であった。また授業風景のビデオでは、生徒との信頼関係がよく伝わってきた。最後に、発音指導は子音を中心にし、その後イントネーションやリズムをレベルに応じて指導するという手順も教えていただいた。和やかな雰囲気の中でフロアとの活発な質疑応答があった。

報告者: 河本圭司(大阪市立大正北中学校)

【第4室】司会: 石川保茂(京都外国語大学)

「初級レベルEFL学習者へのWBT利用シャドーイング練習の影響:学習者達成感と伸長得点の関係」

倉本充子(広島国際大学)

西田晴美(聖母女学院短期大学)

磯辺ゆかり(和歌山大学非常勤講師)

シャドーイングの指導を行う教室環境が、学習者の達成感や、テストの得点の伸び率に影響を及ぼすか



について調査されたご発表である。普通教室とWBT教室との2種類の教室を用い比較されている。この結果、学習環境が、達成感に影響を及ぼすことが示唆された。また、環境が異なることで、事前事後テストの得点の伸びに違いが見られた。参加者からは、WBT群は、繰り返し自分のペースでできたという点が、得点の伸びに影響したのではないかと、などの質問があった。

報告者: 平井 愛(京都精華大学)

「英語によるIT学習と海外英語話者とのSkypeビデオチャット必修化の試み」

両部郁代(京都産業大学)

Skypeを利用したオーラルコミュニケーションの授業実践の報告だった。参加した学生のコメントに、「I'd like to be a better English speaker.」などもあり、英語を使用し、海外の人と交流することが、学生への高い動機付けとなったであろうと思われる。問題点としては、ご発表の中で、アメリカ在住の人が交流相手(パートナー)の場合の時差の問題について言及されていた。実際にこの試みを導入するにあたっては、適切なパートナーを探し出すことが最も難しいであろうと考える。

報告者: 平井 愛(京都精華大学)

ワークショップ(1):

「生徒の発話意欲を引き出し、コミュニケーション能力を伸ばす指導法」

講師: 山岡憲史(立命館大学)

「意欲」、英語に変換するための「基礎力」、4技能を高める「活動」の3つが「骨太の英語力」を作りあげる、という考えに基づき行われた米原高校での活動が紹介された。

「意欲」については、今まで高めてこなかったのではないかと、という反省から、教師全員で改善された。「基礎力」の養成としては、どのように生徒に理解させるか、どのような訓練を与えるか、を参加者で話し合い、その後先生からアドバイスをいただいた。まず理解させるという点では、教師が何を言い、また何を言わないかを考え、説明を短くすること、生徒の発見を促すことについての発表があった。訓練という点で、生徒が飽きないような練習問題として、身近なコンテキストの文を作ったり、競わせたりするといった例が示された。「活動」では、いきなり飛躍せず、書く活動から始めることを薦められ、使うべき表現が決められた「不自由作文」、読んでから書く活動などが示された。

教師が英語で授業を行うことは、教室の中に豊かなコミュニケーションを創るのに役立つ。教師は到達目標や理想を持ち、自分を振り返り、意欲を持って、生徒にわかる、生徒にプラスになる英

語を話そう、と山岡先生は語られた。

配布資料にある生徒のコメントを読むと、生徒が安心して挑戦できる場があり、教師と生徒の間に信頼ある人間関係が構築され、生徒の意欲が着実に高められたと感じた。生徒の意欲を高めること、授業の意味を考えるよい機会であった。

報告者: 山本真理(兵庫県立北須磨高等学校)

ワークショップ(2):

「電子黒板を使って『英語ノート』を生き生きとさせよう」

講師: 吉田晴世(大阪教育大学)

生馬裕子(大阪教育大学)

鄭 京淑(大阪教育大学大学院)

文部科学省は、小学校で必修化される外国語活動に関して、全国で一定の教育水準の確保を図るため、共通教材である『英語ノート』、付属の音声教材(CD)、『英語ノート』教師用指導資料をそれぞれ配布するとともに、これらの教材を用いた効果的な指導について実践研究(「外国語活動における教材の効果的な活用及び評価の在り方などに関する実践研究事業」)を推進しています。これは、全国62機関(都道府県: 46件、政令指定都市: 12件、国立大学法人: 4件)を選定し、小学校における外国語活動の円滑な導入に向けた条件整備を進めるとともに、教育の機会均等などの確保や中学校との円滑な接続を図る観点から、『英語ノート』などの教材の効果的な活用方法や外国語活動における評価の在り方について実践的な取り組みを推進することを目的としている事業です。

多くの小学校では、2009年度からの移行措置を踏まえ、2011年度からの小学校学習指導要領施行に向けて、外国語活動の授業の進め方などについて、具体的な取り組みを進めています。

本ワークショップでは、『英語ノート』という印刷物をよりビジュアルで動的なものにするために、電子黒板(具体的には、スマートボード)を利用する方法が紹介されました。ここでは、スイッチの入れ方からドラッグの仕方まで、指導者と児童が同じ立ち位置で外国語活動を行うことを前提とし、教育現場における電子黒板の様々な活用例が紹介されました。電子黒板の立ち上げには少しトラブルもありましたが、ワークショップの参加者にも実演をしてもらうなど、会場は大変和やかで、笑いがこぼれるものでした。

小学校における外国語活動を考える際には、適切なカリキュラムや指導技術、さらには教材・教具などを考案することが大切だと認識しました。

本ワークショップは、児童のコミュニケーション能力を育てる外国語活動をめざして、『英語ノート』や電子黒板を活用しながら指導の工夫を考え、明日の授業に大変役立つものでした。

報告者: 本田勝久(大阪教育大学)

講演:「Critical thinkingの力を育むライティング授業の勧め」

講師: 大井恭子(千葉大学教育学部教授)

講演の主たる趣旨は、これからの国際社会を生き抜いていくために必要な論理的思考力(critical thinking)を、なぜ英語のライティングで鍛えることができ、どのように授業で鍛えていくかということであった。

最初に、PISAの結果を踏まえ、戦後の作文教育の問題点として、生活つづり方が重視され、「生活の言語」の能力は高めたが、「思考の言語」の涵養につながっていないことが指摘された。日本人学生とアメリカ人学生のエッセイを比較したところ、構造やスタイルなどに大きな違いが見られ、後者は主張の根拠が述べられており、論理的に意見が展開されていた。その理由として、アメリカでは、子供の頃から、情報や知識を複数の視点から分類、分析し、評価するクリティカル・シンキングが教えられているが、一方、日本においては、暗記が重視され、論理的思考力や批判力が軽視されてきたことに原因があるのではないかとのことであった。しかしながら、様々な価値観を持った人々と交渉しなければならない今日の国際社会では、日本人であっても、論理的で説得力のあるコミュニケーション能力を身につける必要があり、その力を英語ライティングで育むことができると主張された。

次に2つの実証研究が紹介され、日本語であっても論理的な文章の方が教員の評価が高く、英語ライティングで学んだ論理的思考力は、multicompetenceとして国語など他教科へ援用できることが示された。実際に、授業でどのように指導すべきか具体的手順も提示され、アイデアの創出と配列、アウトラインの作成、執筆、原稿のピアレビュー、改訂というライティングの各プロセスにおいて、論理的思考力を鍛えられることが分かった。

長年のご研究のエッセンスを1時間半に凝縮し、具体的な事例を織り込みながら、明晰かつ論理的にお話しされ、大井先生ご自身が、高いレベルの論理的思考力を身につけておられることが証明されるご講演であった。理論と実践のバランスがとれた内容で説得力があり、早速先生のご著書を読んで、論理的思考力を育成する授業を実践するのみならず、私自身、教師として日頃から論理的思考力を育む努力をしようと決意を新たにされた。

報告者: 高木亜希子(大阪教育大学)

## 2009年度総会報告(2009年6月6日)

### 2009年度の活動について

#### (1) 研究大会

##### ◆ 関西英語教育学会 第13回研究大会

- ・日時: 2009年6月6日(土)
- ・会場: 摂南大学 寝屋川キャンパス

・講演:「Critical thinkingの力を育むライティング授業の勧め」

講師: 大井恭子先生(千葉大学)

司会 横川博一先生(神戸大学)

##### ◆ 全国英語教学学会 第35回鳥取研究大会

- ・日時: 2009年8月8日(土)、9日(日)
- ・会場: 鳥取大学 湖山キャンパス
- ◆ 全国英語教育学会課題研究フォーラム(2年間の継続研究の2年目)
- ・日時: 2009年8月9日(日)
- ・会場: 鳥取大学 湖山キャンパス 共通教育棟
- ・題目: 「第2言語習得におけるインプットとアウトプットの関係」
- ・コーディネーター: 門田修平先生(関西学院大学)
- ・提案者: メイソン紅子先生(四天王寺国際仏教大学)

門田修平先生(関西学院大学)

佐々木みゆき先生(名古屋学院大学)

村野井 仁先生(東北学院大学)

#### (2) セミナー・共催行事

##### ◆ 関西英語教育学会 第16回セミナー(大阪地区)

- ・日時: 2009年7月26日(日)
- ・会場: 関西大学 千里山キャンパス 岩崎記念会館
- ・ワークショップ: 「『日々の授業にひと工夫』—授業改善のための大切なこと」
- 講師: 太田 洋先生(駒澤女子大学)
- ・鼎談: 「新学習指導要領で、どう変わる? どう変える? 中学、高校の英語授業」
- 太田 洋先生(駒澤女子大学)
- 高木浩志先生(神戸大学附属中等教育学校)

溝畑保之先生(大阪府立鳳高等学校)

司会: 泉 恵美子先生(京都教育大学)

##### ◆ 関西英語教育学会 第17回セミナー(兵庫地区)

- ・日時: 2009年10月11日(日)、12日(月・祝)
- ・会場: 神戸市外国語大学 共用施設ユニティ
- ・テーマ: 「ナラティブが英語教育を変える? —ナラティブの可能性」
- ・第1日目: 「学校英語教師の語りのパワー」
- 講師: 柳瀬陽介先生(広島大学)
- 大津由起雄先生(慶應義塾大学)
- 寺島隆吉先生(岐阜大学)
- 中嶋洋一先生(関西外国語大学)
- 寺沢拓敬氏(東京大学大学院博士課程)
- 松井孝志先生(山口県鴻城高等学校)
- 山岡大基先生(広島大学附属福山中・高等学校)

総合司会: 柳瀬陽介先生(広島大学)

- ・第2日目: 「教室での Teacher-Research を考える」

講師: 吉田達弘先生(兵庫教育大学)

総合司会: 今井裕之先生(兵庫教育大学)

- ・ワークショップ(1):「アクション・リサーチとメンタリング」

講師: 横溝紳一郎先生(佐賀大学)

- ・ワークショップ(2):「明日からできるリフレクションーはじめの一步」

講師: 高木亜希子先生

- ・ワークショップ(3):「言葉にするリフレクティブ・プラクティス」

講師: 玉井 健先生(神戸市外国語大学)

- ・フォーラム&ポスターセッション

#### ◆ 関西英語教育学会 第18回セミナー(京都・滋賀地区)

・日時: 2009年12月20日(日)

・会場: キャンパスプラザ京都 第3・4演習室

- ・ワークショップ:「学習者の自律を目指した授業作り」

講師: 竹下厚志先生(神戸市立葺合高等学校)

- ・講演:「動機づけ研究の観点から見た効果的な英語指導法」

講師: 廣森友人先生(立命館大学)

司会: 清水裕子先生(立命館大学)

#### ◆ 関西英語教育学会 第19回セミナー(奈良地区)

・日時: 2010年1月24日(日)

・会場: 天理大学 杉之内キャンパス

- ・ワークショップ: Our Favorite English Language Activities for Elementary School

講師: Steve Nishida 先生 (Nara Institute of Science and Technology), Ann Maeda 先生 (Osaka Shoin Women's University)

- ・講演:「子供と大人の言語教育、言語習得、言語使用」

講師: 若林茂則先生(中央大学)

司会: 中井英民先生(天理大学)

#### ◆ 関西英語教育学会 第13回卒論修論研究発表セミナー

・日時: 2009年2月13日(土)

・会場: 京都外国語大学 1号館

- ・スペシャル・トーク:「ことばと社会能力: 脳機能画像法による研究」

講師: 定藤規弘先生(自然科学研究機構生理学研究所)

司会: 横川博一先生(神戸大学)

#### その他

- 関西英語教育学会新役員人事: 平成21年度役員追加と会計監査の委嘱について

- (1) 新たな評議員(4名)の追加

赤松信彦氏(同志社大学)

藪内 智氏(京都精華大学)

横田玲子氏(神戸市外国語大学)

鈴木寿一氏(京都外国語大学)

- (2) 幹事(2名)の追加

佐久正秀氏(大阪信愛女学院短期大学)

平井 愛氏(京都精華大学)

- (3) 会計監査2名の委嘱

村田純一氏(神戸市外国語大学)

今井裕之氏(兵庫教育大学)

- 学会誌『英語教育研究』(SELT) 第34号以降の刊行時期の変更について

- (1) 本学会誌の刊行時期の見直しを検討する。

- (2) 刊行までの日程案

原稿募集締切: 8月末日

刊行: 12月

- (3) 第34号(2010年版)から適用する方向で検討する。

- 関西英語教育学会メールリストについて

- (1) 関西英語教育学会の会員へのサービス向上のため、電子メールによる情報提供を行う。

- (2) 電子メールによって提供される情報は、関西英語教育学会会員の教育・研究活動に資するものとし、学会幹事会においてその内容を管理する。

- (3) 全会員への文書による告知・周知徹底の後に学会メールリストの運用を開始する。

#### KELES第16回セミナー(大阪地区)報告

関西英語教育学会第16回セミナー(大阪地区)が2009年7月26日(日)に関西大学千里山キャンパス岩崎記念館にて開催されました。『レベルアップ英文法』(NHKラジオ)&『英語教育』(大修館書店)でもお馴染みの太田 洋先生(駒澤女子大学)を講師として、『『日々の授業にひと工夫』-授業改善のための大切なこと-』と題したワークショップが行われました。また、太田 洋先生、高木浩志先生(神戸大学附属中等教育学校)、溝畑保之先生(大阪府立鳳高等学校)による「新学習指導要領で、どう変わる? どう変える? 中学、高校の英語授業」というタイトルで鼎談が行われました。当日は学期末にもかかわらず、およそ60名の方々が参加されました。

ワークショップ:

『『日々の授業にひと工夫』-授業改善のための大切なこと-』

講師: 太田 洋(駒澤女子大学)

まず、太田先生は「生徒は基礎ができていない」「文法がだめ」「単語力がない」「書けない」などの授業の悩みをどのように解決するのかを聴講者に問いかけ、一緒に考えるところから始められました。太田先生の授業のポイントは「INPUTとOUTPUTを行ったり来たり」だそうです。聴講者をいくつかのグループに分け、教科書を使った活動を考える課題を与えました。各グループともたくさんの意見がかわされ発表を

行い、最終的に太田先生の考えるひとつの例を教えてくださいました。FACT Question, INFERENTIAL Question, PERSONAL Questionの3種類の質問を使い、先生が示し生徒が答えるまたは生徒が作り他の生徒に答えてもらう活動です。この課題の一番のポイントは、何度も教科書に戻らせ内容を読み込ませられることです。さらに、活動後に生徒の“できなかった”から行うフィードバックとしての文法指導は最高のチャンスだそうです。聴講生のどんな意見にも耳を傾け一生懸命に答えられており、聴講生一人ひとりのちょっとした反応や変化にも気がつき対応され、やはりカリスマだと感じさせられました。終始楽しく、たくさん授業のヒントが散りばめられている素晴らしいワークショップでした。

報告者：秋永真由子(大阪教育大学大学院)

鼎談：「新学習指導要領で、どう変わる？ どう変える？ 中学、高校の英語授業」

太田 洋(駒澤女子大学)

高木浩志(神戸大学附属中等教育学校)

溝畑保之(大阪府立鳳高等学校)

司会：泉 恵美子(京都教育大学)

上記のテーマについての鼎談では、高木先生が中学校、溝端先生が高校、太田先生が小学校から大学までの英語授業について発表されました。

まず、高木先生は勤務校である神戸大学附属住吉中学校の取り組みを紹介されました。具体的には、共同学習(役割分担)、自主学習マラソン、振り返り活動、教科リーダー会等です。発表の中で、学校現場が大切にする事により教師が変わり、そして英語の授業、生徒と変わっていくことで明るい展望があるのでは、とまとめていらっしゃいました。

次に、溝端先生より高校の現状と今後の課題について発表がありました。現状としてはいまだ文法訳読式の授業が続いている半面、進化を目指し和訳先渡しや音読指導などアウトプット重視の授業が試みられているということでした。また、新学習指導要領の変更点を踏まえ、今後の課題は英語教師の力(英語力、授業力、生徒把握力、環境整備力)と国公立大学の個別試験(和訳・英作など以前と変わらない出題形式)の二点を挙げられました。この課題の解決法は、生涯学び続け変化に対応することであると結論付けていらっしゃいました。

最後に、太田先生から小学校から大学までの英語教育について発表がありました。教師の立場で必要なものは、①生徒の実態を知りそれに応じた授業をすること、②教師が担当する学校の範囲だけではなく、生徒の以前と今後の学習内容を知ること、であるとのことでした。①の生徒の実態を知るために、アウトプット活動を推進されていました。

三名の先生方から小学校から大学までの英語教育の連携の話を伺い、新学習指導要領によりどのよ

うに変わっていくのか、どのように授業に工夫を加え変えていくのか、具体的な提案をいただきました。今後の英語教育について自分に何ができるのか、何をすべきなのか考えさせられる示唆に富んだ鼎談でした。

報告者：中野利香(大阪教育大学大学院)

## 第35回全国英語教育学会鳥取研究大会報告

第35回全国英語教育学会鳥取研究大会は、中国地区英語教育学会が担当地区となり、2009年8月8日(土)・9日(日)に、鳥取大学湖山キャンパスに於いて開催されました。今回の鳥取研究大会の発表数は200件にもものぼり、事前の参加申込者はおおよそ400名、当日参加者は200名、のべ600名を超える多くの方々が大会に参加されました。今大会でも、発表当日に配布するハンドアウトの代わりに予稿集が作成されました。鳥取研究大会実行委員会では、予稿集を700部印刷しましたが、初日の8月8日(土)が終了した段階では、残部が40部しかなかったようです。

関西英語教育学会の会員の皆様も大会に多数参加され、研究発表者ならびに課題研究フォーラムの提案者として活躍されました。関西英語教育学会が担当する課題研究フォーラムでは、2年間の継続研究の2年目として、関西学院大学の門田修平先生をコーディネーターに、「第2言語習得におけるインプットとアウトプットの関係」と題して、活発な討議がなされました。フォーラムでは、メイソン紅子先生(四天王寺国際仏教大学)、門田修平先生(関西学院大学)、佐々木みゆき先生(名古屋学院大学)、村野井 仁先生(東北学院大学)がそれぞれパネリストとしてご提案され、おおよそ170名のフロアの皆様も熱心に耳を傾けておられました。詳細は次節の「課題研究フォーラム(KELES担当)報告」をご参照下さい。

会員の皆様のご発表を紹介することができませんが、どの発表会場も盛況で、素晴らしい研究発表や実践報告が展開されていたものと思います。研究大会への参会が叶わなかった会員の皆様は、参会者の方々から情報を入手されたり、予稿集などで発表内容をご確認頂ければ幸いに存じます。会員の皆様のご発表が、関西英語教育学会の研究教育活動の素晴らしさを物語るものであったことをご報告いたします。

鳥取研究大会では「フェートン号事件」から数えて200年を迎えるとして、「日本の英語教育200年」と題した特別講演が行われました。日本英語教育史学会会長でもある竹中龍範先生(香川大学)の講演には、おおよそ350名の方々が集まりました。また、大会の最後を飾るシンポジウムでは、「小学校外国語(英語)活動と中・高英語教育の接続—その課題と展望—」と題して、2011年度から必修化になる外国語活動とその後の中学および高等学校との接続について、現状

や課題、今後の展望などについて活発な議論がなされました。

今年は、第36回全国英語教育学会が大阪で開催されます。関西英語教育学会が担当地区になります。会員の皆様のご支援とご協力をよろしくお願いいたします。また、会員の皆様の多くのご参加を賜りますよう、何卒よろしくお願いいたします。末筆ながら、関西英語教育学会と会員の皆様の今後のご発展とご活躍を祈念いたします。

本田勝久（大阪教育大学）

## 第35回全国英語教育学会鳥取研究大会

### 「課題研究フォーラム(KELES担当)」報告

第35回英語教育学会鳥取研究大会において、関西英語教育学会は「第2言語習得におけるインプットとアウトプットの関係」というテーマで、関西学院大学の門田修平先生をコーディネーターとして、課題研究フォーラム(2年間の継続研究の2年目)を企画・運営しました。その発表と提案内容を報告いたします。

#### 【課題研究フォーラムー2年間の継続研究の2年目】

- ・日時: 2009年8月9日(日)
  - ・場所: 鳥取大学 湖山キャンパス C31講義室
  - ・コーディネーター 門田修平先生(関西学院大学)
  - ・提案者 メイソン紅子先生(四天王寺国際仏教大学)
- 門田修平先生(関西学院大学)  
佐々木みゆき先生(名古屋学院大学)  
村野井 仁先生(東北学院大学)

#### 「フォーラムの目的と提案者」

門田修平(関西学院大学)

コーディネーターとして、本フォーラムの目的を次のように述べられた。昨年の第34回大会では、継続テーマの1年目として、多読を中心に、第二言語習得におけるインプットの役割について検討した。それを受けて、今年2年目は、インプットからアウトプットへどうつなげるのかという点に焦点を移して討議する。そして、シャドーイングや音読が、その両者といかに絡んでいるのかについても検討する。

以上の目的が述べられた後、4人の提案者の紹介が行われた。

報告者: 戸出朋子(新潟医療福祉大学)

#### 「インプット理論は成功する改革へのステップ」

メイソン紅子(四天王寺国際仏教大学)

まず、はじめに、実効性の検証のない英語教育法が巷に出回っている現状と、貧困等、家庭が教育的に恵まれていない子どもたちが昨今増加しているという現状が指摘された。その現実を踏まえ、氏は、英語教育研究者の責任と義務は、現場で英語教育に携わる教員のために確かな情報を提供することと、子ども

もたち(特に貧困層)にとって効率的で効果的でしかもお金をかけずにできる教育を提供することである、と主張された。また、完璧を目指す必要はなく、日本の80%の子どもたちの英語力を、現在の場合は大学卒業時まで、今後は高校卒業時まで、中級の上から上級の下までにあげることが目標であると強調された。そして、その目標達成のための効果的・効率的学習法は、インプット理論に基づいた「語り聞かせ」と「読書」である、と提案された。特に、「語り聞かせ」は、単語習得における効果が実証され、加えて、教師と生徒の信頼関係を築き、楽しく、正しい発音を習得でき、文法の習得にも効果的であると述べられた。

報告者: 戸出朋子(新潟医療福祉大学)

#### 「インプットとアウトプットをつなぐシャドーイング・音読」

門田修平(関西学院大学)

インプットとアウトプットをつなぐ役割として、シャドーイング・音読トレーニングの有効性が、認知心理学の観点から論じられた。言語形式を処理してその意味を理解するためには音韻表象の形成が自動化されていなければならない。受動的にリスニングするだけでヒトは、調音するためのモーターイメージをついているということが、最近の脳科学で明らかになってきている。インプットからアウトプットへとつなげるためには、このモーターイメージ(つまり、ことばのテンプレートになるもの)の形成が必要であり、それを促進する学習法として、シャドーイング・音読トレーニングが有効であると提案された。シャドーイング・音読トレーニングは、定型連鎖に基づく産出に有効であり、流暢性の促進の鍵であると述べられた。最後に、Canale & Swainの提唱するコミュニケーション能力の4構成要素に、心理言語学的能力(コミュニケーションに支障をきたさないように、一定の時間内に反応すべく、自動的かつ流暢に処理を行う能力)を加えることが提案され、この能力の育成がわが国の英語教育の最も重要な課題であると強調された。

報告者: 戸出朋子(新潟医療福祉大学)

#### 「アウトプットとしての第二言語ライティング力と動機づけの縦断的研究」

佐々木みゆき(名古屋学院大学)

日本人大学生が、第二言語としてのライティング力をどのように発展させるかを、三年半にわたって氏が調査した研究が報告された。研究では、社会文化的視点を取り入れ、「留学」とその期間の長短が、書くことへの動機づけやライティング力に与える影響が探られた。日本の中学・高校で教育を受けた日本人大学生を、その後の大学生活での英語圏での留学期間により、留学2ヶ月グループ、留学4ヶ月グループ、留学8-11ヶ月グループ、国内滞在グループに分け、1

年次、2年次、3年次、4年次に英作文を書いてもらい、学習経験や動機づけについてインタビューした。その結果、ライティング力は、国内滞在グループは4年で1年次以下に下がったのに対し、留学4ヶ月グループ、8-11ヶ月グループは、4年次において有意に高かった。動機づけに関して言えば、留学した3グループは、imagined L2-related communities(第2言語をコミュニケーションの手段として使う場面が想像できる想像上のコミュニティ)を形成し、特に、4ヶ月以上留学した2グループは、「英語で書くクラス」をimagined L2-related communitiesとし、「もっといいものを書きたい」という内的動機づけを持っていた。国内滞在グループは、imagined L2-related communitiesを形成していなかった。

報告者: 戸出朋子(新潟医療福祉大学)

「インプットからアウトプットにつながる英語授業の有効性—第二言語習得の認知プロセスの観点から—」

村野井 仁(東北学院大学)

インプットからアウトプットにつながる授業として、PCPPによる教科書の題材内容を重視した内容中心教授法が有効であることを、第二言語習得理論による認知プロセスの観点から説明した。PCPPとは、提示(presentation)、理解(comprehension)、練習(practice)、表現活動(production)の流れで行われる技能統合型の授業である。この指導過程を第二言語習得理論に基づいて分析すると、入力処理(input processing)、気づき(noticing)、形・意味・働きの結びつけ(form-meaning-use mapping)、仮説検証(hypothesis testing)、自動化(automatization)など、習得に必要な認知プロセスが有機的に作用するのを促進するものであることがわかる。この従来から行われている指導過程の裏に隠れている認知プロセスを教師が理解し、どの段階も飛ばすことなく、題材の内容理解を大切に丁寧な指導することが、インプットからアウトプットにつながる授業展開の鍵である、と強調された。

報告者: 戸出朋子(新潟医療福祉大学)

フォーラムに参加して

フロアから各提案者に対して活発な質問等が寄せられた。このフォーラムは、各提案者が自らの専門分野の知見を個別に述べたものであったが、それらを統合することは可能であると思われる。まず、村野井氏が提唱するPCPPでも、前半のPC、つまり、確実なインプット理解を前提とするものである。これは、メイソン氏の主張と決して相容れないものではない。そして、「語り聞かせ」及び「読書」は、まさに内容を重視し、その内容を確実に学習者の中に浸透させていく有効な教授法であろう。佐々木氏の研究は、一見、メイソン氏の主張である「家庭が教育的に恵まれない子ども達のために有効な教育を提供する」ということと

矛盾するようであるが、実はそうではないと思われる。佐々木氏の研究の裏にあるものは、imagined L2-related communitiesの形成がアウトプットする力を育成する上で重要な役割を果たすということである。imagined L2-related communitiesの形成を国内の教室でも可能にすることが、これからの英語教育の重要な役割のひとつではないだろうか。最後になったが、門田氏の提案の中のシャドーイング・音読トレーニングも、PCPPの三番目のPにおける指導法となりうる。シャドーイング・音読トレーニングを通して「ことばのテンプレート」を形成することが、最後のPにつながるのである。このように、日常的に行われている授業を各提案者の専門的な知見で眺めることで、このフォーラムは英語教師としての筆者にとってもよい刺激となった。

報告者: 戸出朋子(新潟医療福祉大学)

## 全国英語教育学会理事会報告

○第36回全国英語教育学会 大阪研究大会

- ・会場: 関西大学 千里山キャンパス
- ・日程: 2010年8月7日(土)・8日(日)
- ・担当地区学会: 関西英語教育学会
- ・研究発表申込締切: 2010年5月21日(金)
- ・大会予稿集原稿締切: 2010年6月21日(月)
- ・プログラムの公開: 7月上旬(予定)
- ・参加、宿泊、弁当、レセプション事前申込締切: 2010年7月2日(金)

○第37回全国英語教育学会 山形研究大会

- ・会場: 山形大学 小白川キャンパス
- ・日程: 2011年8月20日(土)・21日(日)
- ・担当地区学会: 東北英語教育学会
- 紀要 (ARELE) 第20号
- ・掲載論文: 29編(研究論文26編、実践報告3編)
- ・学術奨励賞 清水真紀氏

論文タイトル: An Examination of Reliability of an Oral Reading Test for EFL Learners Using Generalizability Theory.

・教育奨励賞 齊田智里氏

論文タイトル: 大学英語教育カリキュラム改革による授業評価と成績評価の改善報告—全学授業評価調査データ分析による改善効果の検証—

※2009年からの「学会賞」は、学術奨励賞と教育奨励賞の2種類になりました。

○2009年度事業計画

- ・第1回理事会開催: 2009年3月28日(土)
- ・第2回理事会および紀要編集委員会開催: 2009年8月7日(金)
- ・第35回全国英語教育学会鳥取研究大会および総会開催: 2009年8月8日(土)・9日(日)
- ・紀要 (ARELE) 第21号刊行: 2010年3月

## KELES第17回セミナー（兵庫地区）報告

関西英語教育学会第17回セミナー（兵庫地区）が2009年10月11日（日）と12日（月・祝）に神戸市外国語大学共用施設ユニティにて開催されました。今回のセミナーは、関西英語教育学会と柳瀬陽介先生（広島大学）の科研および吉田達弘先生（兵庫教育大学）の科研の三者が共同して企画しました。兵庫県教育委員会と神戸市教育委員会の後援許可を得て、2日間にわたって開催されました。

「ナラティブが英語教育を変える？－ナラティブの可能性」をテーマとして開催された第17回セミナーは、1日目は異なる立場から教師、研究者が今の英語教育について発言する形式で、2日目は教師が自身の内面の声を言語化することの意味を考える形式で行われました。「学校英語教師の語りのパワー」と題された1日目は145名の参加者がありました。また、「教室でのTeacher-Researchを考える」と題された2日目は90名の参加者がありました。2日間でのべ235名の皆様が参加して下さい、第17回セミナーは成功裡に終えることができました。

### 【第1日目】

#### 「イントロダクション」

講師：柳瀬陽介（広島大学）

学校英語教育に携わる教師の語り（ナラティブ）にもっとパワーを与えられないか、ということを中心に、今回のセミナーは科研とKELESとの合同企画という形で行われた。柳瀬先生のテンポのいい語り口と、印象的なパワーポイントのスライドで、語りのもつパワー、そして、英語教師の語りの必要性について分かりやすく説明され、会場は一気にその世界に引き込まれた。その後の講演にスムーズに入っていけるイントロダクションであった。

報告者：太山陽子（京都教育大学大学院）

#### 「科学者・市民からみた学校英語教師の語り」

講師：大津由紀雄（慶應義塾大学）

「実践家も理論家も間違ふことがある。」例えば、現在よく言われる、英語教育の本質はコミュニケーションである、ということや、英語の授業は英語で行うべきである、ということは果たして本当に正しいことなのだろうか。大津先生はそれに対して反例を挙げ、物事を盲目的に語ることの危険性や、常に疑いの目を持ちつつ物事を多面的に見ていく必要性について述べられた。つい現在の風潮に流されがちな私たちに警鐘を鳴らすようなお話であった。

報告者：太山陽子（京都教育大学大学院）

#### 「批判的研究者からみた学校英語教師の語り」

講師：寺島隆吉（岐阜大学）

「母語を耕し、自分を耕し、自国を耕す、そのため

の英語教育」－寺島先生のこの一言は、私にとって「英語教育とは何か？」ということをあらためて考えるきっかけを与えてくれたように思う。「効率」「効果」を重視した教授法に目を向けるというよりは、母語と外国語との関わり、国語力と英語力の関わりなど私たちの日々の実践の根底にあるものにより目をむけていくことの必要性を感じた。

報告者：森下知美（神戸市立葺合高等学校）

#### 「中学教師-指導主事-大学人からみた学校英語教師の語り」

講師：中嶋洋一（関西外国語大学）

「ナラティブは自己表現である。そしてナラティブのスキルを磨くことは自己表現のスキルを磨くことにつながる。」－今回の中嶋先生の講義から得たこの「気づき」は、「教師とナラティブ」そして「学習（者）とナラティブ」について、私に新しい理解をもたらしてくれた。中でも、「学習とナラティブとの関わり」について多く学ぶことがあった。講義の中で中嶋先生から「学習の目的」について1つの定義づけがなされた。「学習とは知識を詰め込むことではなく、学び方、考え方、型、ものごとの本質をつかみ、自分の言葉で言語化することである」、この中の「自分の言葉で言語化する」ということこそ「ナラティブ」ではないだろうか？新しい知識、経験にふれる「学習」そしてそこから生じる「理解」を「自分の言葉で言語化する」力。学習者と常に向き合いながら、彼らの学習をより深化させるべく、この「学習者のナラティブスキル」について自分の理解を深めていきたい。

報告者：森下知美（神戸市立葺合高等学校）

#### 「社会学研究者はこう問いかける」

講師：寺沢拓敬（東京大学大学院博士課程）

「社会学とは当たり前と思われていることを疑う学問である」という寺沢さんの言葉は心を打った。寺沢さんは、JACETの紀要論文（第1号から第38号の328本）を分析し、明らかな傾向があることを指摘した。それを私たち英語教育の分野では、当たり前と思って疑わないことが多いかもしれない。しかし、当たり前と思われていることを疑うことも必要であり、それは新たな息吹を英語教育の分野に吹き込むことになるのかもしれない。そんなことを感じさせられる寺沢さんの講談であった。

報告者：本田勝久（大阪教育大学）

#### 「高校教師はこう問いかける：『積極的に発言する高校英語教師』と呼ばれて～」

講師：松井孝志（山口県鴻城高等学校）

大学時代の若林先生との出会い、ボート部部員としての生活、そして高校教師になられてからの変化、をうかがっていると、「高校教師」という言葉でくくられても、自分とは大きく違うのだと実感した。同じように

高校の教壇に立っているように見えても、個々の教師の背景にあるものがその人を作っているのだ。松井先生は、自分の確認のために書き、書くことで自分が前に進む、と言われる。この日、先生のブログには、爽快な気持ちで終えた、とあった。語ることのパワーを感じさせてもらう時間であった。

報告者：山本真理(兵庫県立北須磨高等学校)

「中学教師はこう問いかける：英語授業作りを『作る』立場から語ってみます」

講師：山岡大基(広島大学附属福山中・高等学校)

授業について悩んでいた時代を振り返り、自分の問題点に気づき、自分はどうすればよいのかと考えてきた過程を語られた。当時の先生の感情を正直に語られる場面では、共感した人も多いと思う。最後にフロアに投げかけられた質問は、経験を語る時に誰もが感じる問題であった。自分と向き合うことの恐怖心、人格に関わる不安である。不安がなくなることはないだろうが、言葉にし、分かち合うことで、話し手も聞き手も自分のやり方を見つけていくのではないか。そういった語りの意味を考えさせてくれる講演であった。

報告者：山本真理(兵庫県立北須磨高等学校)

## 【第2日目】

ワークショップ(1):

「アクション・リサーチとメンタリング」

講師：横溝紳一郎(佐賀大学)

教育現場でアクション・リサーチを行うにあたって、「楽しい」という声を聞くことがほとんどないという経験から、横溝先生は教師間の協働性を向上させ、「共創型対話」を進めることでこの状況を改善できないかと考え、メンタリングの導入を提案された。メンターには、聞く・問いかける・フィードバックを与える・やる気を継続するためのケアをする・情報を提供するという役割がある。メンターが、繰り返したり、言い換えたり、気持ちを汲みながら全注意を相手に向けるという「能動的に聞く」態度をとることで、メンティーは問題点を語りながら自分で解決の糸口を見出していくのである。

ワークショップで、「能動的な聞き方」の練習をした後、3人グループで、聞き手、話し手、観察者のそれぞれの役割を体験した。聞き手に受容されていると感じた時、話し手は、悩みを言語化することで考えを整理し、視野を広げることができると実感した。ここで学んだことを職場に持ち帰り、教師間での授業の振り返りに活用していきたい。

報告者：茶本卓子(神戸市立葺合高等学校)

ワークショップ(2):

「明日からできるリフレクシオンーはじめの一步」

講師：高木亜希子(大阪教育大学)

“Who, What, How Why” for reflection: どのような私が何をどう見るか、感じたことを何のためにどう言語化するかについて、ペア、グループ、参加者全体の活動を通して考えました。1つの決まった答えは見つからなくても、「モヤモヤ」をまずは意識化しそれを明日の自分に繋げる、というお話が印象的でした。「語り」を分かち合える空間と、高木先生の柔らかい笑顔に励まされ、一歩を踏み出す力をいただいた気がします。

報告者：中西のりこ(神戸市外国語大学大学院)

ワークショップ(3):

「言葉にするリフレクティブ・プラクティス」

講師：玉井 健(神戸市外国語大学)

靴を脱ぎ、輪になって、床に座る。参加者のエナジーが、円の中心に集結する。ペアで自己紹介、探求の始まり。実践を振り返り、経験(experience)のなかの疑問や困惑を掬い上げ、inquiryの形を与える。“What can I do to…?”問いが埋め込まれた文脈の言語化(describe)、語りが、あの時とこの時、あの言葉とあの表情を繋いでゆく。“I wonder if…”新たな解釈(interpretation)が生まれる。“I could…”手掛かりと希望を持って、私たちは、明日の教室へと旅立った(intelligent action)。

報告者：三野宮春子(兵庫教育大学大学院)

## KELES第18回セミナー(京都・滋賀地区)報告

関西英語教育学会第17回セミナー(兵庫地区)に引き続き、第18回セミナー(京都・滋賀地区)が2009年12月20日にキャンパスプラザ京都第3・4演習室にて開催されました。竹下厚志先生(神戸市立葺合高等学校)を講師として、学習者の自律を目指した授業作りのためのワークショップが行われました。また、廣森友人先生(立命館大学)による「動機づけ研究の観点から見た効果的な英語指導法」と題した講演が行われました。第18回セミナー(京都・滋賀地区)には、非会員の参加者29名を含む計61名の方々が参加され、会場は熱気にあふれていました。

ワークショップ:

「学習者の自律を目指した授業づくり」

講師：竹下厚志(神戸市立葺合高等学校)

ドルニエの「学習者を動機づける10項目」に基づく授業分析アンケートに答えることで講義が始まった。自律を、「自分の学習に責任を持ち、目標設定、教材、方法を自身が選び、進捗状況を把握しながら学び続ける」と定義付け、それを促進させる方法を説明された。教科書を単に進むのではなく、高校3年間を見通して、何ができるようになるのかを視座にBackward Designで授業計画を行う。ポイントは、表現活動を基



軸に置き、「思考」を働かせる「学びの場」としてクラスをコミュニティーと見なし、活動を振り返りことが挙げられた。その際に用意した技能別の目標 CEFR (外国語ヨーロッパ共通参照枠)を改作した到達目標も提示された。こうすることで、自然と4技能を統合した授業が構築される。教員は、ファンリテーターの要素が多くなり、自己表現を促すための発問の工夫も大切となる。あるテキストを題材に発問を小グループで考え、後にそれを紹介する時間もあり、わずかな時間でも多様な発問ができあがった。

報告者: 溝畑保之 (大阪府立鳳高等学校)

「動機づけ研究の観点から見た効果的な英語指導法」

講師: 廣森友人 (立命館大学)

第2言語習得プロセスを探求する研究と個人差に焦点を当てた研究があるが、2000年以降、第2言語を使う理想の自己と現在の自己のギャップに注目する研究も盛んであるなど、最近の動機づけ研究の整理を行い、実践への具体的な示唆に富んだ発表であった。結論は、全ての学習者に秘策となる万能薬はなく、多様性と継続性を備えた動機づけを考えることが大事であるとなった。動機要因の調査結果を顔グラフで示し、教室風景を明示的に捉え、学年での動機の差を示す研究と自律性、有能性、関係性を高める活動を用いたライティングでの研究でのデータを分析された。指導としては、現在の動機を診断し、自覚・意識化を促し、多様な動機を維持する。好影響をもたらす要因は何かを探り、適切な学習法略を使用させ、自己効力感を上げていく。他者の存在も重要で、特に、教師の働きかけが、ポイントを押さえ、タイミングよいものであることが大切である。動機づけ方略の理論化と方略を取り入れた実践がこれから重要となる。

報告者: 溝畑保之 (大阪府立鳳高等学校)

皆で考えよう! 英語教育Q&A: 「学習者が意欲的に取り組む英語授業を想像・創造しよう」

竹下厚志 (神戸市立葺合高等学校)

廣森友人 (立命館大学)

司会: 清水裕子 (立命館大学)

早々と予約締切になった第18回セミナー (京都・滋賀地区)は、参加者とともに考え意見を出し合う時間をはさみ、充実した内容の講義、それに続く「皆で考えよう! 英語教育Q&A」となった。英語教育Q&Aでは、1)クラスを学びの場とするために有効で、また、動機づけで重要な関係性を重視するペア、グループ活動で参加しない生徒の対処方法、2)学習成果の可視化はどう数値化するか、3)習熟度別少人数と動機別少人数の有効性の比較などの点で深いやり取りが行われた。

報告者: 溝畑保之 (大阪府立鳳高等学校)

## 学会誌『英語教育研究』(SELT) 第33号

○掲載論文: 8編 (研究論文6編、実践報告2編)

○紀要編集委員会

・第1回紀要編集委員会: 2009年11月7日 (土)

・第2回紀要編集委員会: 2009年12月19日 (土)

○刊行までのスケジュール

・査読結果通知: 2009年12月25日 (金)

・修正原稿締切: 2010年1月31日 (日)

・『英語教育研究』第33号刊行: 2010年3月31日 (水)

## 学会誌『英語教育研究』(SELT) 第34号以降の刊行時期の変更について

○本学会誌の刊行時期の見直しを検討する。

○背景: 本学会誌が対象としている学術分野と同種の複数の学会誌は投稿時期が秋に集中している。学会員の研究成果公表の機会を広く確保すること、査読委員の確保と負担軽減、などを目的として、(1)を提案・検討する。

○刊行までの日程案

原稿募集締切: 8月末日

査読・審査期間: 9~10月

編集作業期間: 10月~11月

刊行: 12月

○第34号 (2010年版) から適用する方向で検討する。

○紀要編集委員会、幹事会、評議委員などで検討し、最終的には学会幹事会において決定する。

※詳細は、次号のニューズレターおよび学会HPにて会員の皆様にお伝えをいたします。

紀要編集委員長: 横川博一

## 新入会員紹介 2008年12月23日から2010年3月31日(2009年度分)入金確認まで (敬称略・入金順)

富藤 賢治	牧野 眞貴	時岡 ゆかり
高尾 渚	廣田 典代	中島 正恭
井上 聡	西山 幹枝	杉村 醇子
野田 盛一朗	栗原 典子	香林 綾子
西納 春雄	崎濱 秀行	廣森 友人
佐藤 美紀	スミス グレイグ	齊藤 倫子
中野 陽子	森 庸子	正木 美知子
真崎 克彦	細越 響子	太田 裕美子
三野宮 春子	近藤 真之	高井 延子
北田 優方	辻本 昌子	下川 正美
羽柴 多恵子	山岡 憲史	内藤 真帆
反田 任	村田 良一	池田 和弘
野崎 一恵	中野 利香	秋永 真由子
鄭 京淑	武田 家宣	西 香生里
佐藤 臨太郎	奥西 嘉一	高木 勇
木戸 美幸	矢形 勝秀	筒井 哲也
藤本 直哉	紅 麗	大坂 真理
山本 敬子	秋次 留衣	伊藤 祐子
松隈 信一郎	四方 智子	ゼネック西出 ローリー

津田 敦子	王 莉	富田 学誠
堀 朋子	綱井 勇吾	飯田 聡子
富和 由有	出口 未郁	加賀田 哲也
古屋 あい子	古荘 智子	中村 奈美
小林 友宏	川部 和世	水田 良
木梨 安子	阿部 真	榎本 剛士
黒川 愛子	川口 薫	スミス ジェフ
滝澤 伊都子	武村 理世	藤村 まゆみ
植木 美千子	本間 祐子	

2010年度になりまして、ご所属、住所、メールアドレス、その他の変更があった場合は、以下のサイトの「名簿関係お問い合わせフォーム」でご連絡くださいますようお願いいたします。

[<http://keles.web.infoseek.co.jp/info/join/>]

変更のご連絡はKELES携帯サイトでも可能です。

[<http://keles.web.infoseek.co.jp/keitai/>]

携帯サイトトップ→お問い合わせ→名簿関係お問い合わせフォーム

※2010年4月1日(2010年度)からの新入会員の皆様は、次号のニューズレターにてご紹介をさせていただきます。

幹事(名簿担当): 岩井千春

## 会費納入のお願い

関西英語教育学会(KELES)2010年度年会費が未納の方は納入をお願いいたします。関西英語教育学会の年会費は以下の通りとなっております。

1. 一般会員(関西のみ) 5,000円
2. 一般会員(関西+全国) 7,000円
3. 学生会員(関西のみ) 3,000円
4. 学生会員(関西+全国) 5,000円

○年会費は下記までお振り込みください。

- ・郵便振替先口座番号: 00910-7-39666
- ・振替先加入者名: 関西英語教育学会
- 全国英語教育学会に同時入会すると・・・
- ・翌年度の全国英語教育学会で研究発表に申し込みます。
- ・日本の英語教育学研究のトップジャーナルとして定評の高い研究紀要ARELEが無償で配布されます。

※他の金融機関から「ゆうちょ銀行」に振り込まれる場合は、以下の「店名」「預金種目」「口座番号」「受取人氏名」が必要になります。

- ・銀行名: ゆうちょ銀行
- ・店名: 0九九店(読み方: ゼロキュウキュウ店)
- ・預金種目: 当座
- ・口座番号: 0039666
- ・カナ氏名: カンサイエイゴキョウイクガツカイ

## 紀要DVD販売のお知らせ

『英語教育研究』過去28年分、『卒論・修論研究発表セミナー発表論文集』過去9年分(いずれも2005年度刊行分まで)を全て電子化。鮮明な画像で論文を通読できるほか、OCRによるテキスト情報を埋め込みましたので、論文内の単語などでの検索も可能になりました。

○販売価格: 会員価格 3,000円、非会員価格 6,000円(送料込)

○DVD代金振込先

ゆうちょ銀行にて振替用紙(払込取扱票)を御入手いただき、振替用紙の通信欄に「KELES紀要DVD代金」とご記入ください。以下の必要事項を記入して、上記所定金額をお振込みください。

・郵便振替先口座番号: 00910-7-39666

・振替先加入者名: 関西英語教育学会

なお、以下の4点もお忘れなく楷書にてご記入ください。

- 1) ご氏名
- 2) ご所属
- 3) KELES会員資格の有無
- 4) 申込み枚数

DVDの御使用は、購入されました御本人に限定させていただきます。貸与・複写などは固くお断り申し上げます。

会費納入および紀要DVD購入に関するお問合せは、「会計関係お問い合わせフォーム」でご連絡くださいますようお願いいたします。

会費納入に関するお問い合わせ:

[<http://keles.web.infoseek.co.jp/info/help/inq/forms/>]

紀要DVD購入に関するお問い合わせ:

[[http://keles.web.infoseek.co.jp/info/promo\\_dvd/](http://keles.web.infoseek.co.jp/info/promo_dvd/)]

幹事(会計担当): 里井久輝

## 関西英語教育学会 2010年度活動計画

2010年度は全国英語教育学会第36回大阪研究大会が開催されますので、関西英語教育学会研究大会を春季研究大会(6月5日開催)と夏季研究大会(8月6日開催)の2回に分けて開催を致します。なお、春季研究大会では関西英語教育学会総会が開催されます。学会サイトでもご案内をさせて頂いております。最新情報は学会サイトにてご確認下さい。

春季研究大会 ご案内ページ:

[<http://keles.web.infoseek.co.jp/taikai/2010/spring/>]

夏季研究大会 ご案内ページ:

[<http://keles.web.infoseek.co.jp/taikai/2010/summer/>]

## ○関西英語教育学会(KELES)春季研究大会

◆ 日程: 2010年6月5日(土)

◆ 場所: 京都教育大学 藤森キャンパス

- ◆ スケジュール:
- 12:30～ 受付開始
- 13:00～13:40 総会
- 13:50～14:50 ワークショップ: 田縁眞弓先生(立命館小中一貫英語アドバイザー)
- 15:00～16:30 講演: 卯城祐司先生(筑波大学大学院教授)
- 16:30～16:35 閉会式
- ※ 詳細は同封の春季研究大会プログラムをご覧ください。

### ○関西英語教育学会(KELES)夏季研究大会

- ◆ 日程: 2010年8月6日(金)
- ◆ 場所: 関西大学 千里山キャンパス
- ◆ 時間: 13:00～17:00
- ◆ 内容: 研究発表、ワークショップなど
- ◆ ワークショップ: 鈴木寿一先生(京都外国語大学)
- ◆ 研究発表応募方法: 関西英語教育学会「夏季研究大会」のご案内ページより必要情報(以下の内容)を入力して送信して下さい。

[<http://keles.web.infoseek.co.jp/taikai/2010/summer/>]

- (1) 氏名 / ふりがな
- (2) 所属
- (3) 発表種別: 研究発表 / 事例報告
- (4) 発表タイトル ※発表言語に合わせて下さい。
- (5) 概要(日本語400字以内または英語250語程度、(A) 仮説またはResearch Question[問題設定、何を明らかにしようとしたか]、(B) 方法[研究手法、どのような授業を行ったか]、(C) 結果[何が明らかになったか]を明示して下さい。アブストラクトは、ウェブ上で公開されます。)
- (6) 使用機器: PCプロジェクターを使用する / 使用しない
- (7) 共同研究者: 氏名(所属) ※すべて関西英語教育学会員であることをご確認下さい。
- ◆ 研究発表応募期限: 2010年5月31日(月)
- ※ 詳細は、同封の夏季研究大会ご案内をご覧ください。

### ○第36回全国英語教育学会大阪研究大会

第36回全国英語教育学会大阪研究大会を開催致しますので、ご参加下さいますようお願い申し上げます。なお、大会案内、大会プログラム(7月上旬発表予定)、その他大会関連事項は、全国英語教育学会大阪研究大会のウェブサイトにて随時公開します。

研究大会実行委員長 吉田信介(関西大学)  
 研究大会副実行委員長 有本 純(関西国際大学)  
 // 吉田晴世(大阪教育大学)  
 研究大会事務局長 横川博一(神戸大学)

- ◆ 期日: 平成22(2010)年8月7日(土)8日(日)
- ◆ 会場: 関西大学 千里山キャンパス 第1学舎  
大阪府吹田市山手町3丁目3番35号
- ◆ 主催: 全国英語教育学会(地区学会: 北海道英語教育学会・東北英語教育学会・関東甲信越英語教育学会・中部地区英語教育学会・関西英語教育学会・中国地区英語教育学会・四国英語教育学会・九州英語教育学会)
- ◆ 後援: 大阪府教育委員会、大阪市教育委員会、堺市教育委員会、吹田市教育委員会(申請中)
- ◆ 担当地区学会: 関西英語教育学会
- ◆ 重要な日程のお知らせ
- ◇ 研究発表申込み締切: 2010年5月21日(金)
- ◇ 予稿集原稿提出締切: 2010年6月21日(月)
- ※ 予稿集テンプレートは準備中
- ◇ プログラムの公開: 2010年7月上旬(予定)
- ※ プログラム・アブストラクトが公開されます。
- ◇ 参加・宿泊・弁当・レセプション事前申込締切: 2010年22年7月2日(金)
- ※ 5月下旬受け付け開始。ウェブサイト準備中

**第36回全国英語教育学会大阪研究大会公式サイト**  
<http://keles.web.infoseek.co.jp/jasele2010osaka/>

- ◆ 大会全般・予稿集原稿などに関する問い合わせ先  
 大会事務局: 〒657-8501 神戸市灘区鶴甲1-2-1  
 神戸大学 国際コミュニケーションセンター  
 横川 博一 研究室内 yokokawa@kobe-u.ac.jp

### 春季研究大会

- ◆ 日時: 2010年6月5日(土) 13:00～16:35 (詳細は、同封のプログラムをご覧ください)
- ◆ 場所: 京都教育大学 藤森キャンパス
- ◆ 内容: 総会、ワークショップ、講演

### 夏季研究大会

- ◆ 日時: 2010年8月6日(金) 13:00～17:00 (詳細は、別紙および学会サイトをご覧ください)
- ◆ 場所: 関西大学 千里山キャンパス
- ◆ 内容: 研究発表、ワークショップなど

最新情報が学会サイトにて随時更新されますので、頻りに閲覧いただきますようお願いいたします。

<http://keles.web.infoseek.co.jp/>

学会サイトの表示不具合の報告、技術的なお問い合わせは「IT関係お問い合わせフォーム」をご利用ください。

[<http://keles.web.infoseek.co.jp/info/help/inq/forms/>]  
 幹事(IT/HP担当): 佐久正秀

## 2009年度 関西英語教育学会 (KELES) 研究大会 & セミナー一覽

日程	場所	大会名	講師	内容
2009年 4月29日(水)	関西大学 岩崎記念会館	第1回 関西英語教育学会幹事会		
2009年 6月6日(土)	摂南大学 寝屋川キャンパス	第13回研究大会	大井恭子先生	・Critical thinkingの力を育むライティング
7月26日(日)	関西大学 千里山キャンパス	第16回セミナー (大阪地区)	太田 洋先生	・「日々の授業にひと工夫」 ー授業改善のための大切なこと
8月9日(日)	鳥取大学 湖山キャンパス	第35回 全国英語教育学会 課題研究フォーラム (2年間の継続研究 の2年目)	門田修平先生 メイソン紅子先生 佐々木みゆき 先生 村野井 仁先生	・第2言語習得におけるイン プットとアウトプットの関係
10月11日(日) 12日(月・祝)	神戸市外国語大学 共用施設ユニティ	第17回セミナー (兵庫地区)	柳瀬陽介先生 吉田達弘先生 今井裕之先生 他9名	・第1日目: 学校英語教師 の語りのパワー ・第2日目: 教室での Teacher-Researchを考える
11月 1日(日)	関西大学 岩崎記念会館	第2回 関西英語教育学会幹事会		
12月20日(日)	キャンパスプラザ 京都	第18回セミナー (京都・滋賀地区)	竹下厚志先生 廣森友人先生	・学習者の自律を目指した授 業作り ・動機づけ研究の観点から見 た効果的な英語指導法
2010年 1月24日(日)	天理大学 杣之内キャンパス	第19回セミナー (奈良地区)	若林茂則先生	・子供と大人の言語教育、言 語習得、言語使用
2月13日(土)	京都外国語大学 1号館	第13回卒論・修論 研究発表セミナー	定藤規弘先生	・ことばと社会能力: 脳機能 画像法による研究

※ 第19回セミナー(奈良地区)および第13回卒論・修論研究発表セミナーは、次号のニューズレターでご報告いたします。